

シンデレラ像の変化に見るディズニー映画の課題と展望 長編アニメーション映画『シンデレラ』と実写版『シンデレラ』の比較分析 を通して

松田 奈穂子

1950年公開されたディズニー・アニメーションの『シンデレラ』はその後続編として2002年『シンデレラⅡ』(OVA作品)、2007年『シンデレラⅢ 戻された時計の針』(OVA作品)の発表を見た後、2015年実写版の『シンデレラ』公開に至った。アニメーションにおけるシンデレラ像は続編においてどのように変化しているのか、また実写版におけるシンデレラはどのような映画的表現が加えられ、如何なる意味を獲得しているのか。本稿では、アニメーション版『シンデレラ』と実写版『シンデレラ』を比較検討することによって、シンデレラ像の変化を分析し、それが同時代の観客に対して持つ意義を明らかにすることを旨とするものである。

目次

- 第1章 アニメーション版『シンデレラ』のキャラクター像
- 第2章 実写版『シンデレラ』のキャラクター像
- 第3章 夢から現実へ～実写化によるキャラクターの確立～
- 第4章 まとめと今後の課題

第1章 アニメーション版『シンデレラ』のキャラクター

本章では、ディズニー長編アニメーション映画の所謂クラシック三部作(『白雪姫』『シンデレラ』『眠れる森の美女』)の中にあつて、異色の存在とも言うべき『シンデレラ』について考察する。ディズニーのシンデレラは、典型的な受け身のプリンセスである白雪姫、オーロラ姫とは対照的な、自我と意志の強さを特徴としていると言っていいだろう。原作の『シンデレラ』(ペロー版『サンドリヨン』、グリム版『灰かぶり姫』)では、シンデレラの心優しさだけが強調されており、ディズニー版シンデレラに見られるような自尊心は見受けられない。ここで、ペロー版、グリム版、そしてディズニー版それぞれのシンデレラについて比較してみたい。

まずグリム版『灰かぶり』では、母親が亡くなった後、父親が再婚し、継母となった女性が娘を2人連れてくる。グリム版では、この娘2人は「うつくしくて白いのは顔ばかりで」と描写され、容姿に関しては美しいという設定になっている。また、父親が存命ながらも灰かぶりを助けないという設定になっている。灰かぶりが困った時助けるのは亡くなった母親の墓に生えているはしばみの木に現れる真っ白な小鳥であり、ラストシーンではそれまで灰かぶりに意地悪をしていた義姉達は、この鳥に目玉をつつきだされてしまう。

次にペロー版『サンドリヨン』であるが、継母の連れ子である義姉達はおぞましい容姿であるとされており、サンドリヨンが舞踏会に行けるのは名付け親の魔法の力のおかげとなっている。ディズニー版の『シンデレラ』は、物語の展開としては、グリム版ではなく、ペロー版『サンドリヨン』の方を元に作られていると言えるだろう。

この二つの原作とディズニー版との最大の違いは、原作ではいずれも助けが向こうの方からやってくるのに対し、ディズニー版のシンデレラは自分の力でなんとかしようと色々努力したものの、継母や義姉達に邪魔されたため、やむを得ず妖精や小動物の助けを借りている点である。同じ助けを借りるのでも、自助努力を全くしない灰かぶり姫やサンドリヨンと奮闘努力するシンデレラとは意味合いがまったく異なる。例えば、舞踏会に行く為に、シンデレラは母親のドレスを作り直そうとするのだが、継母にこなしきれない量の仕事を言いつけられたために、時間がなくなり諦めかける。落胆したシンデレラが部屋に戻るとネズミ達を作り直したドレスと共にシンデレラを待っているという展開になっている。シンデレラは物語冒頭シーンにもあるように、ネズミ達のために服や靴を縫って与えたりしていることから、その行為に対するネズミ達のお返しであるにとらえることもできる。

結果として彼女の努力は王子との結婚という形で報われる。王子にとっての結婚とは愛する伴侶を得ることだが、シンデレラにとっての結婚とは、愛する伴侶を得るというより、現状から抜け出して高い地位と富を得ることを意味している。冒頭部分『夢はひそかに』(“A Dream Is a Wish Your Heart Makes”)を歌うシーンで、シンデレラは寝ているところを起こす小鳥のお尻をつついて「いい夢を見ていたのに起こすからよ。」と言うのだが、歌詞からも台詞からも、シンデレラの夢の内容は明らかになっていない。示されるのは脱出願望だけである。このシーンではお城の鐘がなることで「うるさい時計ね。時計までが意地悪だわ。1日の始まりね。」と言っていることから、この物語における時計の鐘の役割(時計の鐘が鳴ることで夢から現実に引き戻される)をこのシーンで既に示唆していると考えられる。いずれにせよ、覚めないで欲しいというだけで、歌詞からは夢の内容はわからない。ただし小鳥たちの「言動」が伝えてくれることがある。衝立の後ろで水浴びをし、着替える時や、ベッドメイキングをする時も小鳥やネズミ達が手助けをしており、これはシンデレラが身の回りのことは何でもお付きの者たちに世話をしてもらえという依頼心を持ち続けていることを暗示している。シンデレラは元々は裕福な家庭に育った令嬢であり、世話を焼いてくれる取り巻きを求める、言わばお嬢様育ちに由来する甘えの恒久的実現以外、夢の内容は示されていない。こうした夢は、与えられた雑用を見事にこなし、よく働くシンデレラの姿と相補的關係を構成している。すなわち、元々の貴族の娘という立場から暗転しても気丈に生きることができるシンデレラの強靱さは、厳しい現実から逃れて安楽な生活という漠然とした夢の実現を手にするための手段となるのである。

後の章で詳しく述べるが、アニメーション版のシンデレラに登場する王子は、人格描写が全くと言っていいほどない。舞踏会で出会い、シンデレラの外見にだけ惹かれて会話も殆ど

ないまま恋に落ち、再会する時は一気に結婚式のパレードのシーンに至るという描かれ方はファンタジーにのみ許される設定であり、現実味は一切ない。音楽的にも王子が関係するナンバーは、舞踏会の『これが恋かしら』(“So This Is Love”)と、エンディングの結婚式のシーンで流れる『夢はひそかに』(“A Dream Is a Wish Your Heart Makes”)のみである。現実的な男性像の不在は、彼女の恋と結婚が現状からの脱出／高い地位と富の獲得以外に意味を持たないことを裏付けるものである。

ディズニー版『シンデレラ』は、結婚こそ努力する女性に対するご褒美であるという考え方、結婚こそ女の幸せ、人生の成功という男性にとって都合のいい価値観に貫かれており、前述のシンデレラの意志の強さ、上昇志向はこういった男性中心的枠組みの中で発揮される限り、問題が多いといわざるを得ない。しかし、白雪姫やオーロラ姫には見ることの出来なかった強い意志と上昇志向がシンデレラの特質であること、そしてそれがディズニー映画の女性像における大きな一歩であることもまた確認しておきたい。(注1)森で出会った青年と恋に落ちながらも、生まれながらの許嫁がいると知らされ、諦めて城へと向かったオーロラ姫(『眠りの森の美女』)とは異なり、シンデレラは継母や義姉達の妨害に負けることなく、自らの願望(舞踏会に行くこと)を実現したのである。鍵をかけた屋根裏部屋に閉じ込められたときも、最後まで諦めず、邪魔をするルシファー(義母の猫)の天敵である犬のブルーノを連れてくるよう命じ、状況を打破した。冒頭シーンでブルーノに「天敵のルシファーと仲良くする」ことを諭していたにも関わらず、それをあっさり覆し、逆に仲の悪さを利用する姿はさすがである。白雪姫やオーロラには決して見ることの出来なかった目的の為には手段を選ばない逞しさが、シンデレラにはある。そしてその逞しさこそがシンデレラを惨めな現状から救い出し、下女の身分から一気に一国のプリンセスへと押し上げたのだ。

第2章 実写版『シンデレラ』のキャラクター像

本章では2015年公開された実写版『シンデレラ』のキャラクターについて分析する。実写版『シンデレラ』のテーマは「勇気と優しさ」である。“have courage and be kind”という亡き母の教えを忠実に守ろうと努力するエラ。映画の物語展開から見れば、「勇気と優しさ」のうち「優しさ」は十分発揮されていると思われるが、「勇気」に関しては「忍耐」(patient)の方がじっくりくるのではないか。まずはエラの行動のどこに勇気を見出せるのかを分析するところから始めたい。

監督のケネス・ブラナーは「『シンデレラ』は究極の負け犬物語だと思うのです。だからこそ観客はシンデレラの願いが叶えば、自分の願いも叶うのではないかと希望を感じる。(中略)シンデレラの最も尊敬すべき点は、辛抱強さです。困難が次々に襲ってきても、辛抱強く乗り切る。そこに人は惹かれるのだと感じています。」(注2)

実写版『シンデレラ』では、ヒロインのエラは常に善良であり、死んだ母の言い付けを守って、いつも勇気を持って親切でいようとする。過酷な環境に置かれても悲劇のヒロインに

なる道を選ばず、力強くポジティブな選択をする。虐待ともいえる扱いから逃げ出さずに留まる理由は、エラには強い義務感と道義心があって、両親との約束を果たすことを何よりも優先しているからだ。エラは、王子様が現れるのを待ってもいないし、自ら困難に立ち向かう。もちろん、フェアリーゴッドマザーや動物達による手助けはあるにせよ、それらはきっかけに過ぎず、何から何まで頼りっぱなしで面倒を見てもらう訳ではない。

「勇気と優しさ」が実写版『シンデレラ』のテーマであるが、この場合の勇気とは、「困難に立ち向かう勇気」だろうか。しかしエラは困難に立ち向かってはいない。ただひたすら耐えているばかりである。ラスト・シーンでも、エラは自分から屋根裏部屋を出ようとはしていない。それどころか、ナレーションにもあるように、「辛さは美しい思い出に変わることを知っていた」彼女は、現状を甘んじて受け入れようとしているのである。ここでいうエラの勇気は「いかなる困難にも耐え忍ぶ勇気」であり、*courage* よりむしろ *patience* に近いのではないだろうか。前述のケネス・ブラナーの言葉にもある通り、「辛抱強さ」こそエラの最も尊敬すべき点であり、観客はそこに同情や共感を覚える。エラの辛抱強さは、自分の個人的な幸せよりも、両親との約束を守り抜こうとする *loyalty* にも通じると考えられる。後の章でも論じるが、アニメーション版のシンデレラとは違い、エラには上昇志向は一切ない。エラにとって大切なのは亡くなった両親との約束を守って生きていくことであり、王子との出会いや結婚はあくまでそれに従って生きてきた結果に過ぎない。

ここで、エラの「困難に耐え忍ぶ勇気」を具体的な場面を挙げて分析してみたい。父親の再婚後、継母や義姉達からの冷遇にエラは耐え続けた。耐えきれなくなり、自分の感情を抑えられなくなったのは、「灰だらけのエラ」「シンデレラ」とあだ名をつけられた時と、継母に母の形見のドレスを破られた時の2回だけである。「シンデレラ」とあだ名を付けられた際は、感情の高ぶるままに馬を走らせ、そこでキットという青年と出会う。また、ドレスを破られた時はフェアリーゴッドマザーにより魔法の力で舞踏会へ行き、キット（王子）と再会する。このように、エラが冷遇に耐えきれなくなった時には何らかの救いの手が差し伸べられるのである。これは、挫折と失望の連続を生きる観客の心をつかむ仕掛けである。常に耐え忍ぶエラの姿がある時は歯痒く、ある時は同情の念を抱きながら自らと重ね合わせて見続ける観客は、夢の（代理的）実現を約束されるのである。

第1章で述べたように、アニメーション版のシンデレラは、自我と意思の強さを本質としている。それに対して、実写版のエラは、まったく異なった人格の女性として描かれている。エラは自我を抑え、継母や義姉達の冷遇に耐えながらも、その中で自分なりの楽しみを見つける。例えば屋根裏部屋に追いやられた時は「そうね。静かに過ごせそう。」と言ってその状況を楽しみ、同じ食卓につくことを許されずひとり台所で残りものを食べることを強いられた時にはネズミ達とままごとをして楽しむ。ラストシーンでも決して自分から名乗りを上げることはない。更には、屋敷を後にして王子と共に城へと向かう際、継母に対して「許すわ。」という言葉投げかけている。前述の通り、エラは両親との約束を何よりも重んじた。「この

家にはお母さんの面影も残っている。お母さんの為に家を守るんだよ」という父親との最後の約束を守り、エラは継母からの冷たい仕打ちにひたすら耐えてきた。その家を捨てて、王子と城で暮らすことを選択するという事は、言い換えれば父親との約束を果たす必要がなくなったということである。「家を守って欲しい」という父親の願いは、自分が仕事で家を空ける際に、継母や義姉たちと取り残されるエラを気遣い、「家を守る」という役割を与えることによって、エラ自身に、屋敷における自分の存在意義を認識させる意味があったのではないだろうか。だとすれば、王子と出会い、自分自身の幸せを掴み取ったエラにとって、自分のいるべき場所は、継母と暮らす屋敷ではなく、王子と暮らす城である。自らの存在意義に対する確信を手にしたからこそ、エラは継母に「許すわ。」と告げたのではないだろうか。

「許す優しさ」は作品のテーマ、「勇気と優しさ」に即していると言える。しかしながらこの場合の優しさは残酷さにもつながる。実際のところ、エラに許されたことで継母が救われたかといえばそうではない。ナレーションでも、その後、継母と娘たちは、大公と国外に去ったと明示されている。許しは、救いにはつながらず、その意味でエラの自己満足で終わってしまっているのである。かといって、エラの「優しさ」が否定されるものではない。エラは常に善良で優しくあり続ける。それはアニメーション版シンデレラのような、自分自身に向けられた優しさではない。エラのように常に「良い心」でい続けることは難しい。だからといってアニメーション版のシンデレラのように、自分の権利を行使する為に悪に立ち向かって行き、自分で幸せを掴み取る形では、必ずしも現代の観客に受け入れられないのも事実である。観客は実写版に見られるような、現実味のある生活描写とファンタジーの要素との共存を求めているからである。

第3章 夢から現実へ～実写化によるキャラクターの確立～

アニメーション版のシンデレラで現実味がなく、夢の表現にとどまっていた部分が、今回の実写化では現実に寄り添った内容となっている。

まず一番の改変として、アニメーション版では、シンデレラは舞踏会で初めて王子に出会い、殆ど会話もないままに恋に落ちているのに対し、実写版では二人は舞踏会の前に森で偶然出会い、お互いの身分も知らないままに惹かれあっている。その時も、外見だけではなく、ある程度の会話を経て、王子はエラの内面に強く興味を持つ。エラの方も、はじめて自分を理解してくれる人に出会ったと感じて王子に好意を抱くのである。「彼女が森で王子と出会った時、そこには今までとは違う触れ合いがある。それは情熱であり、活気であり、最初に目が合った瞬間から意味深い魅力を感じさせます。」(注3) また、実写版では王子の役割も非常に重要なものとなっている。アニメーション版では観客は王子の内面について殆ど知ることができないのに対して、実写版では王子の存在ははるかに複雑で興味深いものとして描かれており、大きな困難を乗り越えるエラと出会ったことで、王子は自分で考え、政略結婚など受け入れがたい現実に対してはきちんと立ち向かえるようになる。エラとの出会いは王子

の人生にとっても、自身の成長につながる非常に意義のある出来事として描かれているのである。

アニメーション版では二人のラブ・ストーリーは言わばファンタジーとして描かれ、王子は夢の対象にとどまり、個性がない。12時の鐘が鳴りシンデレラが帰ろうとする時の「待って。行かないで。」など、ほんの僅かな台詞しかない。シンデレラを探し出す時も大公任せで自分では一切動かない。それに対して実写版では父王の心を動かすまで説得し、衛兵に紛れて自らエラを迎えに行くのである。愛する女性を探し出すのに人任せには出来ないという王子の情熱が表れている。そして、このように王子のキャラクターに奥行きを持たせることによって、エラが惹かれる男性像を作り上げていると考えられる。

もうひとり、アニメーション版から大きく変更されたキャラクターが継母である。アニメーション版では終始一貫して冷酷で意地の悪い人物として描かれていた継母であるが、実写版では王子同様、キャラクターの背景が深く掘り下げられており、なぜエラに対して冷たい仕打ちをするのか、その動機が明らかにされている。エラのガラスの靴を壁に叩き付けて割った時、エラが継母に「どうして私にこんな扱いをするの？」と尋ねると、継母は「おまえは善良で若く美しいけれど、私はそうじゃない。」と答える。また、病気で亡くした前夫を愛していて幸せに暮らしていたことも明かしており、二人の娘のため、人生をやり直すために再婚したにも関わらず、再度夫を亡くし、経済的な不安やパニック、嫉妬からエラに辛くあたるようになってしまったのである。これは非常に現実的で説得力のある動機であり、主人公であるエラには及ばないとはいえ、観客に十分共感を覚えさせる存在となっている。継母一家がエラの家に移ってきた出会いのシーンで「娘さんがこんなに美人だったとは。」という継母に対し、父親は「母親が美人だったんだ。」と言う。先妻への想いと実娘への愛情を吐露するこの台詞は、出来の悪い娘二人を背負う後妻にとっては、残酷と言う他ないものである。実写版では、まさにこの台詞こそがエラと死んだ母親を重ね合わせる引き金となり、その後の継母のエラに対する冷遇の動機付けになったと考えられる。例えば、パーティーに明け暮れる継母が自室にいる父親を呼びに行くシーンでは、父親とエラが亡き母について語っており、「この家にはお母さんの面影も残っている。お母さんの為に家を守るんだよ。」「お母さんが恋しいよ。」とエラに対して父親が心情を吐露している。その言葉を偶然にも聞いてしまった継母の胸の傷みは観客にとっても共感を覚えさせるものではないだろうか。かくて、翌日父親が旅に出ると継母はエラを、エラの母親が愛用していた形見の裁縫道具と共に屋根裏部屋へ追い込むのである。

アニメーション版と実写版の大きな違いの一つに、エラのドレスへのこだわりが挙げられる。実写版ではエラは母の形見のドレスにこだわる。確かにアニメーション版でも「亡くなったお母様のドレスよ。」という台詞はあるが、「亡くなった母の形見だから大切にする」という描写は一切なく、そのドレスを義姉達によってボロボロにされた時も、母の形見を滅茶苦茶にされたからというよりはむしろ単純に舞踏会に行けなくなったことに悲しんでいるだ

けである。その後、フェアリーゴッドマザーの魔法で舞踏会に行く支度を整えてもらっている間も彼女の関心は自分のドレスに集中しており、「このドレスでは舞踏会には行けないわ。」という台詞からも、見た目へのこだわりだけが感じられる。それに対して実写版シンデレラでは、エラはドレスが亡き母の形見であることにこだわっている。仕立て直したドレスを「ボロ着」とけなされた時も、「お母様のドレスよ！」と憤る。フェアリーゴッドマザーにドレスを直してもらうシーンでは、「お母様の形見のドレスだから変えないで欲しい。」と頼むのである。実写版では、アニメーション版とは違って、エラのドレスを引きちぎるのは義姉達ではなく継母になっている。この時も引き金となったのはやはり「亡くなった母親のドレス」であったことだと考えられる。以上のシーンに見るとおり、継母はエラを通して見え隠れする前妻の影に嫉妬し、苦しんでいるのであり、そこに至る細かい描写が実写版ではなされていることが確認出来る。ファンタジーではなく、現実の世界で起こり得ることを背景に設定することによって、観客に継母の視点を理解させているのである。

さて、シンデレラに欠かせないのは、窮地に陥ったときに助けてくれるフェアリーゴッドマザーと動物たちの存在である。アニメーション版では、特にネズミ達存在が大きい。時間がないシンデレラに代わってドレスまで作り、塔に閉じ込められたシンデレラのために命懸けで鍵を運んでくる。もちろん、一方的にシンデレラを助けている訳ではなく、毎日シンデレラに餌を与えてもらい、洋服を縫ってもらい、天敵である猫のルシファーから守ってもらっているという背景があるのだが、いずれにせよ、ネズミ達なくして物語は成り立たないほど、その存在は大きい。それに対して実写版では、ネズミたちの存在は控えめで、エラとの関わりも殆どない。屋根裏部屋に閉じ込められた時に、王子にエラの歌が聞こえるよう窓をそっと開けるぐらいである。もちろんそれが物語の大きな鍵になることに変わりはないのだが、あくまでも「現実世界におけるファンタジーの要素」という役割を超えることはない。

アニメーション版のシンデレラと実写版のエラの最も大きな違いは、それぞれの作品のラストシーンにある。いずれにおいてもシンデレラは屋根裏部屋に閉じ込められるのだが、アニメーション版では、シンデレラは何としてでもそこから抜け出すために、最終的には犬のブルーノを利用することを思いつき、「猫と仲良くしなきゃだめよ。」と冒頭で説教していたにもかかわらず、他の動物たちに指示してブルーノを連れてこさせ、邪魔をしていた猫のルシファーを塔の窓から落として鍵を手に入れるのである。動物への思いやりや優しさはそこには感じられず、目的の為に手段を選ばない逞しさがそこには見られる。それに対して実写版のエラは、屋根裏部屋に閉じ込められたままで、そこから出られなくてもいいと思っているかのように見える。それは諦めではなく、そのまま自分の置かれた現状を受け入れているのである。ナレーションにもあったように、「悲しみは美しい思い出に変わることを知っている」という姿勢で、家に訪れた客が誰なのかにも一切興味を示さず、ただただ歌っている姿に、ねずみ達が業を煮やして、力を合わせて窓を開けるのである。

アニメーション版のシンデレラは、物語冒頭シーンで窓の外のお城を憧れの眼差しで見な

がら歌っており、現状からの脱却に加えて上昇志向があることを映像、音声両面から示しているが、実写版のエラは亡き父や母との思い出を何よりも大切にしており、家を抜け出すことを目的とはしていない。家を出ることになったのも、王子と結ばれてプリンセスになったのも、全て自然な成り行きに身を委ねた結果に過ぎないのである。森で偶然出会った青年「キット」と恋に落ち、「キット」がたまたま王子だったことでプリンセスになったのだ。そもそも舞踏会に行きたい理由もアニメーション版とは違い「森で出会った見習いの青年キットに再会したい」という単純なものであり、継母に「友達に会いたいです。」と言っている通り、「王子」との出会いなど一切期待していない。ラストの結婚式のシーンで、王子がエラに“My princess.”と呼びかけているのに対し、エラは“My Kit.”と答えていることから、エラの意識が「王子」という立場ではなく「キット」その人に向いているということが伺える。また、2章でも述べたように、彼女は決して自分から名乗りをあげることはない。最終的に幸せをつかんだのは、王子であるキットが自らシンデレラを探し、迎えに行き、見つけ出したからであり、このシチュエーションこそが現代女性の心に訴えたのではないだろうか。(注4)

アニメーション版では王子は迎えに来ない。お城に留まり、ガラスの靴を落としていった娘が探し出されるのを待っているだけである。シンデレラが動物達の助けを借りながら自分で窮地を脱して、お城への切符を勝ち取るのである。言い換えればアニメーション版の『シンデレラ』は継母や義姉対シンデレラの戦いの物語であり、シンデレラはその戦いに勝つ。

尚、本編においては継母や義姉達のその後については触れられていないが、2007年に発表されたOVA作品『シンデレラⅢ 戻された時計の針』は、シンデレラに対する継母の復讐劇となっている。2002年の『シンデレラⅡ』(同じくOVA作品)は義姉の1人であるアナスタシアのその後について取り上げているが、ここでもシンデレラはアナスタシアに協力することで、娘の平民との恋愛に反対する継母と対立している。シンデレラとアナスタシアとの関係性や細かい描写から推察すると、やや曖昧な点は見られるものの、『シンデレラⅡ』『シンデレラⅢ』という時系列であると考えられるので、シンデレラと継母の対立関係は続いており、『シンデレラⅢ』で決着がついたと解釈することができるだろう。詳細は稿を改めて論じたい。こうした続編的なOVA作品も含めて、アニメーション版では、実写版とは違って継母がシンデレラを憎む理由が明確化されておらず、観客はシンデレラが「悪」である継母に勝つ事に安堵するという単純な勧善懲悪の物語となっているのである。実写版のように、観客が継母の感情に共感を覚えることは基本的にはあり得ない。

以上に述べてきた通り、アニメーション版と実写版の間には大きな差異が認められる。物語としての改変はもちろんの事、何よりも登場人物それぞれにきめ細かな背景を与え個性を明確にしたキャラクター作りが、実写版の物語世界に対して、多くの観客に共感を覚えさせ、魅了したのだと考えることができるだろう。

第4章 結論と今後の課題

実写版の『シンデレラ』はアニメーション版のシンデレラをファンタジーの世界のヒロインから、現実世界のヒロインに変え、自らの人生に真摯に向き合う等身大の女性として描き出した作品である。エラは現代を生きる女性達にとって、共感できる存在であり、シンデレラはおとぎばなしのお姫さまから、身近な存在へとその立場を変えたのである。なぜ実写版の『シンデレラ』がこれほどまでにヒットしたのか。それは本論文で示した通り、エラをはじめとする実写版のキャラクター達や彼らを取り巻く背景が、現実世界に寄り添ったものであるからに他ならない。多くの観客は登場人物ひとりひとりに自分を重ね合わせることによって、作品をより身近なものに感じる事が出来るのだ。

アニメーション版の『シンデレラ』は、文字通り不遇なヒロインのサクセスストーリーであり、それはファンタジーの枠組みの中でのみ成立する物語である。魔法という超自然的な力によって初めて物語は成立し、作品中の出来事は現実社会では起こり得ないものばかり。観客は、あくまでも現実と切り離れたファンタジーの枠組みの中で物語を楽しむのである。一方、実写版は少なくとも人間心理の面においては現実には起こりうる物語であり、観客は主人公のエラに同一化するのみならず、王子、継母を初めとする複数の登場人物に共感し、作品世界の中へと導かれる。「自分達にも起こるかもしれない物語」として多くの観客を魅了するのである。アニメーション版とは違って他の登場人物の個性を際立たせることにより、更に多くの層の観客の共感を得ることにつながったと言えるだろう。

ディズニー・アニメーションの実写化計画は『ザ・ビースト/美女と野獣』(2017年公開予定)、『リトル・マーメイド』、『ムーラン』(公開日未定)をはじめ、『アリス・イン・ワンダーランド』(2010年公開)の続編、『アリス・イン・ワンダーランド2』(2016年公開予定)、『ピノキオ』(2018年公開予定)、『クルエラ/101匹わんちゃん』、『ジャングル・ブック』、『チップとデール』、『ダンボ』(公開日未定)など、更に進んでおり、しばらくは実写ブームが続きそうだ。このうち、『ザ・ビースト/美女と野獣』、『リトル・マーメイド』、『ムーラン』については、引き続きアニメーション版のヒロイン像との比較分析を行ない、そこから実写版の意義と今後の展望について考察したい。『美女と野獣』は2014年にフランス・ドイツの合作で一度実写化されており、新たに製作されるディズニー版の実写作品との比較も考察していきたい。実写化により、アニメーション版の限界をいかに超えることが出来るか。これが今後のディズニーの課題である。その検証は、アニメーション映画研究のみならず、広く映画学にとって大きな意味を持つと信ずる。

- 注1 Amy M. Davis, *Good Girls and Wicked Witches*, pp. 101-102.
- 注2 『シンデレラ』 公式パンフレット Director's interview
- 注3 シンデレラビジュアルブック
- 注4 興行収入 57 億 2000 万。4 月 25 日に初日を迎えた同作は、全国 521 スクリーンで公開され、動員ランキングで初登場ナンバーワンを記録。5 週連続首位、8 週連続ベストテン入りを果たした。

参考文献

- 有馬哲夫『ディズニーとは何か』（NTT 出版、2001 年）
- 金田鬼一訳『完訳 グリム童話集』（岩波文庫、1979 年）
- 高橋義人『グリム童話の世界』（岩波新書、2006 年）
- 廉岡糸子『シンデレラの子どもたち—現代おとぎ話におけるヒロイン像の変遷』（阿吽社、1994 年）
- 『ディズニー シンデレラ ビジュアルガイド』（角川書店、2015 年）
- 『シンデレラ』公式パンフレット（ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン、2015 年）

Davis, Amy M. *Good Girls and Wicked Witches: Women in Disney's Feature Animation*. John Libbey Publishing, 2006.

Giroux, Henry A. and Pollock, Grace. *The Mouse that Roared: Disney and the End of Innocence*. Rowman & Littlefield Publishers; Updated and Expanded Edition, 2010.

Solomon, Charles. *A Wish Your Heart Makes*. Disney Editions, 2015.

参考映画作品

- 『白雪姫』（*Snow White and the Seven Dwarfs*）. Dir. William Cottrell, et al. 1937. DVD. ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社, 2009.
- 『シンデレラ』（*Cinderella*）. Dir. Clyde Geronimi, et al. 1950. DVD. ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社, 2012.
- 『シンデレラ 2』（*Cinderella II*）. Dir. John Kafka. 2002. DVD. ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント, 2005.
- 『眠れる森の美女』（*Sleeping Beauty*）. Dir. Clyde Geronimi, Eric Larson, et al. 1959. DVD. ウォルト・ディズニー・スタジオ・ホーム・エンターテイメント, 2008.
- 『美女と野獣』（*Beauty and the Beast*）. Dir. Gary Trousdale, Kirk Wise. 1991. DVD. ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社, 2010.
- 『マレフィセント』（*Maleficent*）. Dir. Robert Stromberg. 2014. DVD. ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社, 2014.